

# TABI-Ciao 特集記事

## 長崎大学医学部生、実はこんなこともやっています！！



世間から見てみると、勉強ばかりしているように見えがちな医学部の学生。しかし、実はいろんなことに手を出しています。

この特集では面白い活動を行っている医学部の学生さん取材します。

今回、特集する学生さんはTABI-Ciao代表の医学部3年の末英明(すえひであき)くんです。

### 1 まずTABI-Ciaoについて簡単に教えてください。

TABI-Ciao!は「旅をしていない時も旅先でのワクワクする出会いを」「長崎の旅人を増やす」をテーマに活動している団体です。TABI-Ciao!という名前にはTABI(旅)とCiao!(挨拶)、「簡単な挨拶から始まる出会いこそが旅」という意味と「旅しちゃおう!」という意味を込めています。

主な活動は2ヶ月に1回の旅人交流会、旅のワークショップなどです。10月には超豪華なゲストを迎えてトークライブを行います!

### 2 TABI-Ciao設立に至った経緯を教えてください。

福岡や大阪、東京には旅のサークルが沢山あるんですよ。けど、長崎にはない。じゃあ作るか、ということで立ち上げました。コンセプトとしては、旅の魅力をもっと色んな人に知って欲しい、旅をしていない時に旅の楽しさを共有できるような空間、ゲストハウスのラウンジのような空間を長崎に作りたと思っています。立ち上げてすぐ、たまたまTwitterで同じ考えを持った人を見つけて声を掛け、実際に会うことになり意気投合して今のTABI-Ciao!が生まれました。本当に偶然の連続で生まれたものなんです。

### 3 末くんがTABI-Ciaoに込める思いや、TABI-Ciaoを通してみんなに伝えたいことはありますか?

僕の一番大事にしている言葉が「違いを受け入れることはできないけれど、違いがあることを受け入れることは出来る」です。これをまずTABI-Ciaoを通して理解して欲しいです。出会いがなんだとかずっと思ってますが、割と真面目な団体です(笑)。そもそも「出会い」という言葉ってもっと素敵なものだと思うんですよ。出会い系という言葉がこの世にあるから、イメージが良くないだけで。別に出会い系を否定するわけではありませんが(笑)話がそれました。そう、「出会い」です。

嫌なことや悩みがあるときも、たった一人との出会いが解決することってありませんか?もちろんその逆もあるかもしれませんが。けど、今まで出会ってきた人達がいたからこそ今の自分があると僕はいつも考えています。人との出会いが人を成長させます。

だったら、旅じゃなくても良くない?っていう人もいます。それが街中であっても、クラスの中でもいいんですよ。ただ、旅をしている時の出会って絶対初対面じゃないですか。それが延々と続く。だから一言目の挨拶やフィーリングでその人のイメージが決まって、相手の情報がほとんどない真っ白な状態で探りながら距離を詰めて行く。それって相手を見極める能力も付きますが、自分がどんな人間なのか知ることの出来る、省みることのできるチャンスだと僕は思うんです。こんな考え方もあったのか、と自分の世界が広がっていく。実際僕は、いつもその瞬間ってブワッって本当に視界が広がるような感覚に包まれます。どんどんこの感覚を繰り返して行くと、「違いを受け入れることはできないけれど、違いがあ

ることを受け入れることは出来る」ようになるんじゃないかなと思います。その体験をみんなと共有出来たらなと考えています。

また、もともと医学部に入った時は海外で働きたいなんて考えたこともありませんでした。けれど、アジアを旅して、日本に比べて豊かとは言えないけれど、日本で生活する人たちよりも幸せそうに生活しているように見える人達を見て行くうちに、自分はこの人たちのために仕事をしたいという思いが強くなっていきました。それがいいことかは分かりませんが旅をしていたからこそ将来の自分が具体的に見えるようになったのだと思います。

### 4 余談ですが、末君のいままでの旅の中で強烈な出来事などありましたか?笑

インドのガンジス川で沐浴してお腹を壊したこと、カンボジアでレディーボーイに追いかけられたこと、ベトナムとラオスの国境で夜を明かしていたバスが野犬に囲まれたこと、マレーシアの富豪のムスリムのパーティに参加したこと、タイの屋台で飯食ってたら目の前に座った男の人がキタ〇ビの化学の先生だったり、ここには書けないようなことなど、旅中は毎日がわくわくの連続ですが一番強烈なのは帰りの福岡空港で麻薬探知犬に身体中嗅がれたことですかね。もちろんやってません(笑)

### 5 最後に自由にどうぞ!

今までの人生で出会ったことのないような人と知り合いたい人、とにかくワクワクするような出来事を求めている人、旅に興味があるけどどうすればわからない人など、どんな人でも必ずTABI-Ciao!で素敵な「出会い」があります。

10月4日に「死ぬまでに見たい世界の絶景」の著者、詩歩さんなど豪華なメンバーを迎えてトークライブを行います。将来海外で働きたいという方にも、次の休みに海外に行きたい人にも、必ず役に立つ情報ばかり。医者だから旅なんて関係ないなんて思わないでください。医療は世界中で必要とされます。医療は武器です。僕らは世界のどこでも活躍する可能性を持っています。TABI-Ciao!を通して将来の可能性を広げませんか?

申し込みはこちらのQRコードで!!

詳しくはoneworldtrip@icloud.com(未)まで



編集長 松本 学(学友会 広報部)

編集部 長崎大学医学部ぐびろが丘編集部 長崎医学同窓会 〒852-8523 長崎市坂本1丁目12番4号 ☎095-848-5484 E-mail: ryojun-do@med.nagasaki-u.ac.jp

印刷 株式会社インテックス

## TALK LIVE

## TABI-Ciao! X 超豪華旅人7名で長崎に届ける最高の旅イベント



TABIPPO代表 清水 直哉さん



死ぬまでに行きたい世界の絶景 詩歩さん



Photripper代表 岡村 龍弥さん



トラベルライター 窪 咲子さん



Smile Earthオーナー 吉田 有希さん



PEPT創設代表 赤田 佳奈絵さん



冒険家 石川 仁さん

★7人の旅トークライブなど & ゲストの書籍販売やサイン会  
★イベント後に交流会開催!ゲストと一緒に飲んで語ろう!

10月4日(土) 14:30 開場 15:00 開演~18:00 @長崎大学 スカイホール





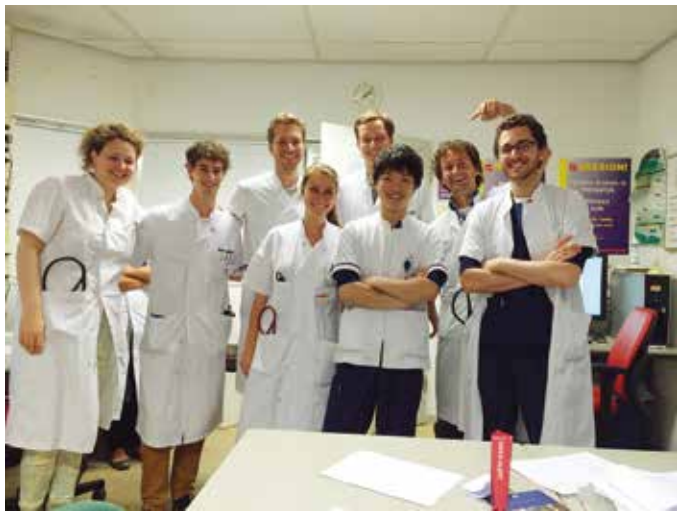
# 海外体験記 オランダ・ライデン大学

## 留学体験記

長崎大学医学部6年 竹山 誠

4月7日から5月4日の4週間、オランダのライデン大学にて高次臨床実習を受けさせていただきました。

実習初日、今日は何をするのかな、病院の見学とかガイダンスとかがあるのかな、と循環器内科の医局で待っていると、病棟部長の女の先生がやってきて、「ライデンへようこそ。たくさん学べる4週間になればいいわね。ところで何を学びたいの？この4週間は自由に動いていいから見たところがあったら参加してみてね。たぶん、頼んでくれるはずだから。それじゃ、がんばって、そして楽しんでね」とい



病棟で、循環器内科の皆さんと

わゆる、さすがに自由の国オランダ、こんな感じか！自分から動く4週間にせねば！と気持ちの医療を数々行っているというカテゴリーを見させていたことになりました。カテゴリーも



Van der Beek先生と

らって驚いたのが、その国籍の多彩さです。スペイン、イタリア、ギリシャ、エジプト、そして日本からも留学に来ていた先生がいらっしゃいました。ヨーロッパの医師はEU共通の医師免許を持っていて、フットワークが軽く日本の医師よりも若い段階でどんどん海外へ修行しに行くらしく、その面では日本の事情とは異なり羨ましい部分だと感じました。また、オランダは国民のほとんどが英語を話すことができることも、そうしたフットワークの軽さを生んでいます。多くのチームに、オランダ人以外のスタッフがいて、そうした時も英語でコミュニケーションが取れます。そして患者さんの多くも英語を使いこなせるため、言語面での不便さはあまり感じないです。今回、病棟での実習もさせていただいて、こうして患者さんとコミュニケーションをとる機会に恵まれました。

さて、ライデン大学の循環器内科はあの心電図の発明で有名なEinthovenがかつて教授をしていたというところもあり非常に発展していて、カテ室ではMitralClip、TAVI、幹細胞の心筋内への経カテーテル的移植などこれまで聞いたことなかったような様々な最先端の治療が行われていました。そうした最先端の医療を求めて多くの志高い医師達が各国からやってきて日々活躍しており、まさに循環器の未来をみることができ、エネルギーに

満ちた先生方のお話を沢山聞くことができました。また毎日行われる入院患者についてのカンファレンスや定期的に行われる学会発表用のプレゼン発表も非常に白熱していました。上下関係のないようなものが日本ほどしつかりあるわけではなく、教授でさえもファーストネームで呼び合う文化においては、わからないことや疑問に思ったことがあればすぐ質問してそこから白熱した議論が始まります。納得いくまでそれぞれ意見をぶつけ合い、そしてそれを皆が楽しんでいました。

実習中、沢山の人の出会う循環器内科以外の科にも触れ合うことができました。カテ室で知り合った心臓専門の麻酔科の先生は、珍しい症例がある時は手術室に呼んでくれて、何度も見学させてくれ、エコールームで知り合った4年生の学生は自分が所属している解剖学教室に連れて行って

で知り合った6年生の学生が自分の回っている耳鼻科に連れて行って診察に混ぜてもらったり、多くの素晴らしい方々と出会って、助けてもらって、毎日が新しい事との出会いの連続で、刺激的な日々を送ることができました。また休日也非常に充実した日々を送ることができました。ロンドンやベルギーを旅したりもしましたが、なにより沢山の人が知り合っただけでなく、パーティーに参加したことが一番印象に残っています。日本人の

先生が一人留学に来られたのですが、その先生の先輩で、ドイツで医者をやっている先生と、その友達で、医師業を休業して世界旅行をしている先生達と共に、ライデンの近くの街のハーグへ観光に行く機会がありました。今回出会った日本人の医師はこの3人の先生だけで、日本語で話をするのがとても新鮮でした。3人の医療についてのお話をお聞きすると、やはり常に世界基準で物事を見てそうした広い視点から医療、そして人間性というものを考えておられるのだ、自分もそうした視野を持たねば、と身にしみる思いでした。

たった一ヶ月の留学でしたが、オランダから日本を見つめなおし、医療の違う日本と欧米諸国の違いを感じることができました。いろいろな国籍、業種、宗教の人達と共通の英語という言語を使って各々の考えを伝え合うことができる環境が当たり前のようにはオランダにはあり、その環境に身を置くことの素晴らしさをまだ学生のこの時期に体感できたことは、自分にとって非常に大きな経験となりました。

た、このような世界各国との違いを体験することでの日本の医療の改善できる点、逆に日本の医療のすばらしい点、さらには日本という国の様々な美しい文化、日本人固有の美しい精神性、さらには日本人が彼らから学ぶべきところなど、多くのことに気付かされる示唆に富んだ一ヶ月間を送ることができたと思います。ぜひ少しでも留学を考えている人がいるならば是非挑戦して欲しいと思います。沢山のことを考えさせられ、そして楽しい一ヶ月間を過ごすことができたとは思っていません。是非皆さんにも留学を通して何かを感じてほしいと、心からお勧めします。今回一人での留学ということもあり不安も多分なりましたが、多くの手を差し伸べてくださり結果的に非常に得るものが多い充実の留学となりました。留学にあたりご尽力くださった小路武彦教授を始め、HBeuters教授、MJSchall教授、Luc先生及び、関わってくださったすべての方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

私は2014年4月7日から5月2日までドイツのBunzlauer大学で一般外科、救急科(麻酔科)を2週間ずつ見学させていただきました。お忙しい中面倒を見てくださったProf.Decker、Prof.Gerner、Dr.Mullenbachそして様々な先生方には大変感謝しております。一般外科での実習は朝6時40分のラウンドから始まります。(朝きつからた笑)採血は学生の仕事であり、6年生のいかにドイツ人という大柄の学生が、当然のごとく繊細な手さばきで採血を行っていき姿を初日に見せつけられました。ラウンドにおいて最も印象的なことは、Prof.Gernerの気持ちのいいくらい「Guten Morgen (おはようございます)」から始まり握手で終わるとい患者さんとの信頼関係の構築の仕方です。また、患者さんとの会話はドイツ語で行われるため、Dr.Flemmingがその都度英語に要約して説明をもらったり、私たちが常に気にかけていたこと体験を重ねていきました。

King's Day! 街中オレンジで朝からビールでお祭り騒ぎです!

た。基本的にはラウンド後はオベ室に向かい、自分で好きな手術に入るというスタイルの毎日でした。救急科では午前1人、午後1人というスタイルで実習に参加しました。基本的にはICU管理の患者さんの処置をする先生について回るといったスタイルをとりました。様々な手技、そして画像診断のレクチャー、ラウンドにおいて疑問にもったことについてレクチャーを受けるといったことが基本です。救急科を回ったのですが、先生は全員麻酔科医でした。なぜならドイツには救急医という概念は存在しないから。ICU管理はもちろん麻酔科の担当なのですが、救急患者さんのFirst touchも麻酔科の先生が行います。このシステムは非常に興味深かったのですが、麻酔科の先生を中心として各科の先生方がshared room (救急外来処置室)に集まってきて自分の出番かどうかを各自が判断して協力して治療にあたるといシステムをとっています。ヨーロッパの中で日本と同様な救急システムを持つのはフランスが代表的で、ドイツはそのようなシステムをとっていないとのこと。こうして、ひとつひとつ当然だと思っていたものが自分が知らないだけだったという体験を重ねていきました。

そして今回の留学の責任者である精神科のProf.Deckerのご厚意で、一日だけ精神科も見学させていただきました。精神科の病棟は独立しており、そのためか治療は様々な木工、アートセラピー、音楽療法、またプールやテニスコート、毎朝体操を行う部屋など日本では見られない独特のものがあります。一日だけではありましたがラウンドから各治療法の説明、施設の案内までしていただきました。



休日はもちろん外出です。Prof.Deckerの車でRotterdamにドライブする機会もありました。Profesor直々に一日中様々な場所を案内していただき、様々なものをごちそうしていただき感謝しかありません。休日は土日に加えて、祝日も多く4連休が2回ありました。それを使い、ドイツをはじめてとしてオランダ、ベルギーなど様々な場所を訪れました。また、学生の試験終わりの全体パーティー(クラブでやりました)に参加したり、学生で飲みに行ったり平日も休日も毎日楽しいことばかりでした。今回の実習を通して、何事も自分から動かないと何も得られないということを強く痛感しました。大学病院での実習では受け身の姿勢でも学ぶことができるが、この1か月間は自分で疑問を持ち、質問し、何がしたいかという自分の意志を強く発信しない限り何も進まないということを学びました。(もちろん医学の勉強もしました)偉そ

最後にになりましたが、今回の実習を行うにあたってご尽力くださった小澤教授を始め、Prof.Decker、Prof.Gerner、Dr.Mullenbach、楠本さん及び関係者の方々には大変感謝しております。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。



# 海外体験記 Bunzlauer大学

長崎大学医学部6年 手賀 丈太

た。基本的にはラウンド後はオベ室に向かい、自分で好きな手術に入るというスタイルの毎日でした。救急科では午前1人、午後1人というスタイルで実習に参加しました。基本的にはICU管理の患者さんの処置をする先生について回るといったスタイルをとりました。様々な手技、そして画像診断のレクチャー、ラウンドにおいて疑問にもったことについてレクチャーを受けるといったことが基本です。救急科を回ったのですが、先生は全員麻酔科医でした。なぜならドイツには救急医という概念は存在しないから。ICU管理はもちろん麻酔科の担当なのですが、救急患者さんのFirst touchも麻酔科の先生が行います。このシステムは非常に興味深かったのですが、麻酔科の先生を中心として各科の先生方がshared room (救急外来処置室)に集まってきて自分の出番かどうかを各自が判断して協力して治療にあたるといシステムをとっています。ヨーロッパの中で日本と同様な救急システムを持つのはフランスが代表的で、ドイツはそのようなシステムをとっていないとのこと。こうして、ひとつひとつ当然だと思っていたものが自分が知らないだけだったという体験を重ねていきました。

最後にになりましたが、今回の実習を行うにあたってご尽力くださった小澤教授を始め、Prof.Decker、Prof.Gerner、Dr.Mullenbach、楠本さん及び関係者の方々には大変感謝しております。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。



# 福島の震災

4年 市川 宏美

8月18日、23日、5泊6日で「放射線災害医療サマーセミナー2014」に参加した。長崎大学・福島県立医科大学・笹川記念保健協力財団の共催で、福島県内で開催された少人数セミナーだ。

震災から3年半が経過した。これまでに何度か被災地に向いたが、そのほとんどは石巻市を中心とする宮城県内だった。原発のことを、放射線のことを勉強しなければと思いつつ、だいたい時間が経ってしまった。

訪れた福島で、原発や放射線のこと以上に私に強い印象を残したのは、福島の人たちだった。これまでの私の経験と併せて、セミナーで出会った人たち・知った人たちのことを書きたい。

「福島を応援する」という誤解  
サマーセミナーではプログラムの一環として、第二原子力発電所の見学をさせていただいた。第二原発は地震発生から5日目の3月15日、全号機の冷温停止を達成しており、現在は停止中である。第一原発の影響により、線量は原子炉建屋の中よりも外の方が高いという、東電の方からすると「不思議」な状態だ。原子炉格納容器の中は鉄アミで組み立てられ、全体的には圧力容器の周りをぐるりと囲む構造だ。あちこちに様々なバルブや装置が存在しているため、通り道は複雑で、人ひとり分ほどの幅しかない。

見学ルートで压力容器の真下まで入っていたことができた。事前に読んでいた、事前に書かれていた、事故直後にこのような場所での作業に当たった人たちの姿を頭の中に映した。電源がない、冷やせない、線量が高くて近づけない。その間にも原子炉は人間のコントロールを離れつつある。本当にギリギリの状態。

事故を起こした会社・その協力会社の人間だから作業にあたるのは、社会人として確かに当然と言える。しかし、この方たちの覚悟と必死の作業のおかげで、私たちは今、震災前とほとんど変わらない生活を送れている。もし彼らがいなかったら、関東を含む日本の広い範囲から人がいなくなっていた可能性は決して低くない。ここ長崎にも多くの人が集まり、限られた土地や食べ物、お金、仕事を奪い合う場になつていたかもしれない。

私たちにとってこの事故は決して他人事ではない。東電の組織としての元々の防災対策の不足、甘い見直し、対応の悪さに対し、現在までにかんがりの指摘がされてきている。そうした組織という入れ物に対するのと同じく、その中に入っている人々、事故に巻き込まれた人々、今も作業に当たる人々、今も何を、私たちは謙虚さをもって知るべきだと思う。この人たちが被災しながらどういう気持ちでどう動いていたか、動いているのか。それによって守られているのは何か。誰か。

玉川啓さんという、第一原発に入られた方が2012年4月11日に「Fukushima」投稿された文章が、私の現在の思いと重なった。以下はその投稿からの引用である。「間違いないと言えることは、現場の支えがなければ、東日本は吹っ飛んでいました。」

「むき出しの鉄骨を見て、改めて事態の深刻さを痛感しました。テレビとは明らかに違うのです。そして、その現場で体一つで作業している方々がいます。その中には被災者がいます。われわれ日本人はそういった方々に今この時も支えられているのです。」

改めて福島を応援するということが誤解であることに福島の人で今を支えていること、それによって日本を支えられているのです。だからこそ、この問題は皆がまさに当事者なのです。

立ち上がった福島の人たちは「強い」か  
セミナー期間中に、福島市街で偶然知り合った方、南相馬市で話をしてくれた方、川内村の、村長をはじめとする皆さん。また、福島で働く私の古くからの友人。出会った福島の人たちの側面の中で、私が強く心を揺さぶられたのが、彼らの「レジリエンス（復元力）」だった。

2011年3月15日、第一原発の4号機が水素爆発を起こした後、川内村では村長より全村民に自主避難が指示された。それから一年も経たない2012年1月、村長は「帰村宣言」を発表、同年に役場機能の復帰、学校の再開、診療所・福祉機能の再開、除染作業をハイスピードで実現し、帰村を望む人々の期待にこたえてきている。この背景には、長崎大学や福島大学、京都大学との連携、ホールボディカウンターによる無料検査などを行った、村長のパワフルな行動力がある。さらに驚くのは、村への企業誘致、土を使わない野菜工場の新設とそこでの雇用創出、診療所の診療科増と医師の増員など、「復興」の範囲を越え、震災以前よりも成功した地域モデルを創っている点だ。私は、これが自治体の長に就く人の才能と手腕なのだと思う。しかしこれは表面的な理解だ。

その夜の懇親会の場で、ふと、遠藤村長は東電をどう思っていますか？と聞いた。それまでの話の流れは、川内村の成功とこれからの意欲についてだった。私の質問に急に複雑な表情を見せた村長は、「恨んでいてもしようがないから。」と言った。込み上げる気持ちが伝わる間があった。自身も家族とともに被災し、全く知識のない放射線に耐え、プライバシーのない避難生活をしなければならなかった。単に「村長」として前向きに仕事を全うしてきたのではなく、村長自身がこうした苦難の時を経験した「被災者」でもあった。

遠藤村長と同じような福島の人々の姿を見たのは、初めてではなかった。私は長崎大学編入前の2012年夏、石巻市内に拠点を置くNPOの手伝いをしている、福島市内での取材の折、福島で公務員をしている友人に会いに行っていたことがある。彼は福島で被災した後、福島復興にとつても大切で難しい仕事を任されていた。その勉強量がとてもすごいものだと言っていた。時間はかからなかった。私は、復興を目標にひたすらに仕事を組み合わせた真面目さを尊敬した。しかし別れ際、私は軽い気持ちで、今度石巻にも来てみて、と言ったとき、彼は「被災地を見るとその時のことを思い出さずにはいられない。」と言った。

村長も私の友人も、逆境に倒れない「強靱さ」を持つていたのではない。被災者として、周りのものや人を失って悲しみ、怒りや恨みも抱いたのだと思う。彼らを持つて、そして傷つき倒れたのち、再び立ち上がる、しなるようなしなやかな心。

このような人々たちを知って、私は自分の中に沸く気持ちをうまく言葉にするのができない。出会った福島の人たちは前向きに普通の生活をしている人がほとんどだった。精神的に、あるいは淡々と復興に向かうその姿には、切なく苦しいが、大切にしたい、その人の歴史がある。

戦争や原爆について、体験者が後代にそれを伝えようとする理由は何だろうか。きっとそのひとつは、「傷ついた人がいる。」

「いつになったら、私たちの土地に帰れますか？」  
「すぐに影響はなくても、いずれ痛くなるんじゃない？」  
「子供が虫を触っても大丈夫ですか？」  
科学的に適切な答えは、勉強すれば今の私たちでも見つけられるだろう。しかし、それを伝えることが答えにはならない。福島県立医科大学の先生方、看護師さんたちは、このような質問をする一人ひとりへの向き合い方を考えて続けている。

最後に  
私がこれを書く最中も、福島についての様々なニュースについて、色々な人がそれぞれに反応していた。その反応は同じこともあれば、私の近い友人の間でさえ、対立していることもあった。それらを見て、私は自分の考えやこの記事の内容についてまったく定まらなくなつた。ここに書かせていただいた私の考えは通過点のひとつであり、これからの経験を増やしたり批判をいただいたり議論をしたりすることで、刻々と変化していくだろう。しかしそれは無意味な遠回りではなく、有意義な試行錯誤なのだと思ふ。セミナーではたくさんの方の話を聞かせていただいたが、分かった！と言えることは今、一つもない。できるだけたくさんの方と、福島についての会話を繰り返して、この試行錯誤を続けていきたい。

「災害とは何か」  
「福島医大での震災患者対応にあたった医師として」  
「避難者のメンタルヘルス」  
「福島での震災でどのようなことがあったのか」  
「放射線基礎」  
「放射線災害後の福島の現状」  
「放射線測定・フィールド測定・霧箱実験」  
「原発事故後のリスクコミュニケーション」  
「福島県民健康管理調査から見てきた福島の健康問題」  
「原発事故後の福島県内における甲状腺超音波検査について」  
「チェルノブイリ報道の真実と虚構」  
「チェルノブイリと福島」  
総合討論  
修了証授与  
懇親会

大戸 齊 (福島医大 副学長)  
喜多 悦子 (笹川記念保健協力財団 理事長)  
長谷川 有史 (福島医大 救急医療学講座 助教、放射線災害医療センター 副センター長)  
前田 正治 (福島医大 災害こころの医学講座 主任教授)  
大津留 晶 (福島医大 災害医療総合学習センター長、放射線健康安全管理学講座 教授、放射線災害医療センター長)  
松田 尚樹 (長崎大 先端生命科学支援センター 教授)  
熊谷 敦史 (福島医大 災害医療総合学習センター 講師・副センター長)  
熊谷 敦史  
安井 清孝 (福島医大 災害医療総合学習センター 助手)  
吉田 浩二 (福島医大 災害医療総合学習センター 助手)  
松井 史郎 (福島医大 放射線医学県民健康管理センター 広報コミュニケーション部門長 特命教授)

鈴木 眞一 (福島医大 甲状腺内分泌学講座 主任教授)  
タチアナ・ログノビッチ (長崎大 原爆後障害医療研究所 国際保健医療福祉学研究分野 助教)  
山下 俊一 (長崎大 理事、副学長)  
大津留 晶

遠藤 雄幸 (川内村 村長)  
林田 直美 (長崎大 原爆後障害医療研究所 国際保健医療福祉学研究分野 講師)  
折田 真紀子 (長崎大学大学院 医歯薬総合研究科 保健学専攻 看護学講座 助教)  
猪狩 恵子 (川内村役場 保健福祉課 保健福祉係長)

川内村のこれから  
川内村復興にかかわる保健師活動支援  
避難所等での保健活動  
川内村での意見交換会

津波・原発被災地 見学

## 福島に関するセミナーのお知らせ

「福島県川内村復興支援」をテーマに、以下のようなセミナーが開催されます。

日時 2014年11月22日(土) 10:00 ~ 16:00

場所 長崎原爆資料館ホール 長崎市平野町7-8 (変更の可能性あり)

演題・演者は未確定ですが、「白熱教室」と題し、学生が復興のためにできることを考えていくプログラムがあります。申し込みは不要です。

興味のある方はぜひ、参加してみてください。

放射線災害医療サマーセミナー2014 スケジュール

日	会場	講師	
8/18 (月)	福島医大	開会式	大戸 齊 (福島医大 副学長)
		「災害とは何か」	喜多 悦子 (笹川記念保健協力財団 理事長)
		「福島医大での震災患者対応にあたった医師として」	長谷川 有史 (福島医大 救急医療学講座 助教、放射線災害医療センター 副センター長)
		「避難者のメンタルヘルス」	前田 正治 (福島医大 災害こころの医学講座 主任教授)
8/19 (火)	福島医大	「福島での震災でどのようなことがあったのか」	大津留 晶 (福島医大 災害医療総合学習センター長、放射線健康安全管理学講座 教授、放射線災害医療センター長)
		「放射線基礎」	松田 尚樹 (長崎大 先端生命科学支援センター 教授)
		「放射線災害後の福島の現状」	熊谷 敦史 (福島医大 災害医療総合学習センター 講師・副センター長)
		「放射線測定・フィールド測定・霧箱実験」	熊谷 敦史
		「原発事故後のリスクコミュニケーション」	安井 清孝 (福島医大 災害医療総合学習センター 助手) 吉田 浩二 (福島医大 災害医療総合学習センター 助手)
		「福島県民健康管理調査から見てきた福島の健康問題」	松井 史郎 (福島医大 放射線医学県民健康管理センター 広報コミュニケーション部門長 特命教授) 大津留 晶
8/20 (水)	福島医大	「原発事故後の福島県内における甲状腺超音波検査について」	鈴木 眞一 (福島医大 甲状腺内分泌学講座 主任教授)
		「チェルノブイリ報道の真実と虚構」	タチアナ・ログノビッチ (長崎大 原爆後障害医療研究所 国際保健医療福祉学研究分野 助教)
		「チェルノブイリと福島」	山下 俊一 (長崎大 理事、副学長)
		総合討論 修了証授与 懇親会	大津留 晶
8/21 (木)	南相馬市 鹿島保健センター	第二原発 東京電力 第二原子力発電所 見学	
8/22 (金)	川内村役場	「川内村のこれから」	遠藤 雄幸 (川内村 村長)
		「川内村復興にかかわる保健師活動支援」	林田 直美 (長崎大 原爆後障害医療研究所 国際保健医療福祉学研究分野 講師) 折田 真紀子 (長崎大学大学院 医歯薬総合研究科 保健学専攻 看護学講座 助教)
		「避難所等での保健活動」	猪狩 恵子 (川内村役場 保健福祉課 保健福祉係長)
		川内村での意見交換会	
8/23 (土)	富岡町 周辺	津波・原発被災地 見学	



### 第53回 九州・山口医科学生体育大会

団体戦、個人戦の入賞結果を以下にご報告します。

#### 団体戦

バレーボール部男子	第三位	
バスケットボール部男子	第三位	
卓球部男子	優勝	
卓球部女子	第四位	
バドミントン男子	優勝	
バドミントン女子	第四位	
剣道男子	優勝	
弓道女子	第三位	
サッカー	第四位	
硬式テニス男子	優勝	
硬式テニス女子	第四位	
軟式テニス男子	準優勝	
軟式テニス女子	優勝	
水泳部	優勝	
フットサル	優勝	
ボート部	男子舵手付きフォア対校部門	優勝
	男子舵手付きフォア一般部門	準優勝

#### 個人戦

卓球女子個人戦ダブルス	優勝	桃下・石松
	第四位	伊藤・松尾
バドミントン男子ダブルス	優勝	中村・本多
	第三位	村橋・岡本
バドミントン女子ダブルス	第三位	戸野本・石橋
剣道女子個人戦	優勝	溝口千乃
弓道男子個人戦	第三位	古川翔太
弓道女子個人戦	第三位	梅津彩香
ソフトテニス男子個人戦	第三位	宮崎・神田
ソフトテニス女子個人戦	準優勝	高村・廣瀬

試合結果より、長崎大学医学部の部活動は他校と比べ高いレベルにあることがうかがえます。8月に行われました「西日本医科学生体育大会」の結果にも期待が深まります！

それではまた次号の学友会便りでお会いしましょう！

優勝 長崎大学

準優勝 鹿児島大学

第三位 山口大学

## 学友会便り

長崎大学医学部学友会

みなさん、こんにちは。今回の学友会便りでは山口県にて執り行われました、「第53回九州・山口医科学生体育大会」の結果をご報告します。  
九州・山口医科学生体育大会は毎年3月～4月にかけて行われます。この大会で良い成績を残すために多くの医学部生が春休みを強化練習にあて、練習に励んでいます。  
今回の九州・山口医科学生体育大会では、長崎大学は大学別の総合順位で見事優勝を勝ち取りました。

### 西日本医科学生体育大会 結果 2014

硬式テニス男子	ベスト8
硬式テニス女子	なし
軟式テニス男子	準優勝
軟式テニス女子	3位
サッカー	なし
野球	ベスト4
バスケ	なし
バレー男子	ベスト8
バレー女子	なし
バドミントン	なし
弓道	なし
卓球	なし
ボート	団体 4位
	舵手付きフォア 2位
陸上	なし
水泳男子	優勝
水泳女子	優勝
剣道男子	ベスト8
剣道女子	なし
ラグビー	なし

### 講演会・研究会のお知らせ

#### 「長崎臨床内科医会」

今号でも学生の参加大歓迎の講演会・研究会をお知らせします。

#### 第276回例会

日時：2014年11月25日（火） 19:00～  
場所：ホテルニュー長崎  
演題：『頻尿』

#### 第277回例会

日時：2015年1月27日（火） 19:00～  
場所：ホテルニュー長崎  
演題：『マイコプラズマ肺炎の診断、治療』  
長崎大学大学院医歯薬総合研究科  
新興感染症病態制御学系専攻 感染免疫学講座  
臨床感染症学分野 教授 泉川 公一

以上の例会に参加希望のある方は、gubirogaokashimbun@gmail.com まで、もしくはお近くの編集委員まで！

上記に加え、福岡の記事で紹介したセミナーもあります！こちらは事前の連絡は不要です。

### ☆オニオングラタンスープ



今回は、温かいスープの作り方を紹介しました。寒い秋の季節、みなさん、カゼには気を付けてください！スープで体もHOT、こころもほっと♡、いたしませんか??♡



#### 〇作り方

- ①玉ねぎを薄くスライスします。
- ②お皿に玉ねぎを広げて並べます。上から塩をふり、レンジで6分温めます。ラップはかけませんよ♡
- ③鍋に、温めた玉ねぎ・バターをいれ、中火で5、6分炒めます。玉ねぎが透き通り、量が半分になるくらいまで、炒めますよ♪
- ④ウスターソースを加え、さらに3、4分炒めます。
- ⑤水・コンソメを加え、中火で沸騰するまで煮ます♪(ここで、もしあれば、炒め玉ねぎペーストを加えると、ますます美味しくなりますよ♪おススメ!)
- ⑥耐熱容器に、スープ・フランスパンを1切れずつ入れます。最後におこのみで、とろけるチーズをトッピング♡
- ⑦230度のオーブンで、9分焼きます。
- ⑧完成!



#### はじめてのレシピシリーズ

#### ♡一人暮らしのお料理♡

「お料理でからだも心もほっこり♪」  
みなさん、こんにちは！  
秋も深まり、紅葉がきれいな頃になりました♪風も肌寒く感じられます。皆さん、体調を崩してはいませんか？  
今回は手軽に作れて、からだもホッと温まる、そんなお料理を紹介していきますよ♡

〇材料 玉ねぎ(1個)、バター(小さじ2)、塩(小さじ1)、ウスターソース(大さじ1)、コンソメ(1個：5グラム)、水(500cc)、とろけるチーズ(適量)、フランスパン(2切れ：幅2cm)  
〇+αのおすすめ調味料 炒め玉ねぎペースト(40g)

#### 編集後記

こんにちは。最近マティ・マールのチーズナンにはまっている松本です。今回の記事は例年のことになった内容となっています。これからも面白い記事を書いていきたいと思うので、楽しみにして下さいね♪  
(松本 学)

新しいメンバーで迎えた2号目のぐびろが丘新聞です。みんなテキパキ、しっかり者が多いので頼りっぱなしです…。  
(市川宏美)

秋の風を感じる季節になってきました♪  
今回の料理コーナーではあたたかいスープを紹介しています。秋と冬、美味しいものをおなかいっぱい食べたいですね♪  
(和田澄華)

今回、あまり戦力になれなかった山本です。テストをのりきって次号こそはなにか新たな風を吹かせたいと思います！  
(山本侑季)

こんにちは。今回、山本さんと西医大の結果報告を担当しました、荻野です。夏も終わり、涼しい季節になりましたね。栗やお芋が好きな私にはたまらない季節です！スポーツの秋、食欲の秋、みなさん楽しみましょう♪  
(荻野恵梨)

最近、マティマハルで働いて思うだともよく言われる野本です。夏休みも終わって後期が始まりましたね！今回も全く仕事をしないで次号こそ頑張ります、ナマステ。  
(野本和宏)